

## 2020 年度東広島市教育委員会主催・広島大学マスターズ共催市民講座

## 「小学生のための実践的な将棋講座」実施報告

広島大学マスターズ会員 早瀬 光司

各小学生が将棋を通して「深く考える」、「自分で考える」姿勢が身に着くことを目指しています。

令和2年の8月3日、4日、11日、12日の4回（13時30分開講～15時閉講）にわたって、昨年に引き続き「小学生のための実践的な将棋講座」を開講させていただきました。

今年の受講生10名の内訳は、6年生1名、5年生2名、4年生5名、3年生1名、2年生1名でした。まず、第一回の8月3日には、机10枚を円形に並べ机一つに1名ずつ小学生が円形の外側に座り、早瀬が内側に入って10名全員に早瀬が順繰りに指して回る「将棋の多面差し」を行いました。

昨年は最初に詰将棋の問題を出して各小学生の棋力を調べ、日本将棋連盟・五段の早瀬が駒を落とす（10枚落ち、8枚落ち、6枚落ち等）の手合いで対局を開始しましたが、今年は一律に2,3年生は10枚落ち、4,5,6年生は8枚落ちの対局から始めました（駒落ち差の大きい方が下手が勝ちやすくなるので）。なお、駒落ち将棋では早瀬を上手（うわて）、小学生を下手（したて）と呼びます。

また、昨年は小学生が沢山指せるように1局目を指し終わった子にも続けて2局目を指したのですが、そうすると閉講時刻になっても1局目の終わらない子が出てきたりして困りました。そこで、今年は1局目が指し終わった子のために詰将棋の問題を用意し、1局目を終了した後に、詰将棋をしたいか or 2局目を指したいか、を聞いて、2局目を指したいという子には「閉講時刻に近づいたら1局目の終わっていない子を優先するので、途中で打ち切るけれどそれでもいいですか？」と聞いて、OKという返事であれば2局目を指すことにしました。実際にそれでやってみると、全員が1局目を確実に指し終えることができ昨年に比べてうまく改良ができたと思えました。

今年はその藤井聡太が棋聖と王位の2冠、タイトルを取るなどして将棋の人气がさらに盛んになってきていますが、今年の小学生もみな真剣なまなざしで将棋を指そうとしていたことが印象的でした。早瀬は上手として駒を落としているので下手（小学生）にとっては勝ちやすいのですが、それでも小学生が上手に勝ち切るのは容易ではありません。しかし、そういった状況でも、下手として（ほぼ最善手に当たる）好手を考え出して、早瀬を負かしてくれる小学生が出てくると今年もそれを嬉しく感じる自分がいました。

また、対局が終了したのちには必ず感想戦を行います。途中の局面を再現して「この局面ではこう指した方が良かった」という手を指摘し指導して、今後の参考にしてもらいます。そして、勝った小学生には駒落ちの数を次回には少なく設定します。そうすることによりその小学生にとっては前回より勝ちにくくなるので、彼らは棋力を高めようと頑張るということになります。例えば、第一回には10枚落ちだった2年生の子は第四回には4枚落ちの手合いにまで棋力を伸ばしました。また、ほかの子も皆それぞれのレベルでしっかりと棋力を伸ばしました。

なお、昨年は早瀬にとって初めての多面差しで 10 数名に即座に対応し続ける対局を 1 時間以上続けたことで、第一回の講座が終わった後には体が疲労困憊でしたが、今年は下手がよく考えられるよううまく時間配分を調整できたので、互いにじっくりと将棋を指すことができました。今年もみな、真剣に一所懸命に頭を使って将棋を指してくれたので「うれしい気持ち」でした。

さて、

将棋とは、頭の中で**緻密**に考えることを具現化した知的形態です。そして、人間の思考力を向上させ生長させる力を内在しています。例えば「3 手の読み」というのがあり、人の生き方にも繋がっています。今年も各小学生の熱心な姿勢や思考力を伸ばすさまを見て、「自分で、深く考えようとする力」を育む将棋の持つ生長力の大きさを、深く再認識した（心豊かな）将棋講座でした。